

2021年3月

## 今月の新着図書から

小津夜景『漢詩の手帖 いつかたこぶねになる日』（素粒社、2020年）

高等科図書主任  
林 知宏

この本との出会いは偶然であった。『新釈漢文大系詩人編 1 陶淵明』（明治書院）が刊行されているのを確認しようと、池袋のジュンク堂4階を訪れた際、同じ列にさほど目立つことなく並べられていた。私にとってOzuとは、かの映画監督小津安二郎である。同じ姓を持ち、女性で、俳人で、フランスに20年来在住しているという。本の帯に「この人、何者？」というキャッチコピーが記されているが、私もすぐにそう思ったし、誰も同じことを考えるだろう。出版社の思惑に見事にはまり、吸い寄せられてしまった。結果として、実に新鮮な読書体験を得て、満足感に浸ることができた。まさに本を読了するのが惜しいと思うことしきりで、こうした経験は久しぶりであった。

この本は、作者がつれづれなるままに記したエッセイとそれにまつわる漢詩が取り上げられる。中国の大詩人たち、杜甫、白楽天、蘇東坡などに加えて、日本の菅原道真、良寛、夏目漱石などにも注目する。作者は、そのブログ「小津夜景日記」で「日本の漢詩人を5人選ぶなら」ということでその3人に加えて、平安時代の島田忠臣（828-892、菅原道真の師で岳父）を入れるという（あと一人はあえて空席だそうだ）。小島憲之編『王朝漢詩選』（岩波文庫）にも何首か所収されているこの詩人について、私は今までまったくまなざしを向けたことがなかった。もちろんその意味で勉強になったのだが、この本は息苦しさを感じさせない。気軽に漢詩と彼女の日常から醸し出されるエッセイを純粋に楽しむことができる。それは詩人の選択だけでない。例えば、杜甫ならばもっと著名な作品が多くあるのに、あえて食を題材にした「槐葉冷淘」が掲げられる。蘇東坡も水を飲む詩。また、先の『王朝漢詩選』に含まれる藤原忠通（1097-1164）の「賦覆盆子」（「野いちごの詩」と題される）を目にしたとき、私は少しばかり衝撃を受けた。漢詩は圧倒的に男性中心の世界である。したがって、その時代の状況の中で自身の境遇を描いたものや、孤独、憂愁、友情、酒、隠遁を、時には社会の矛盾を直視する内容になることが多い。「こうした詩もあり得るのだ」と感じた。著者の目のつけどころが実に良い。

私自身とまったく異なる境遇、生活基盤がもたらす世界の見方、漢詩とエッセイの結合スタイルが何よりユニークさをもたらしている。読書をする醍醐味は、こうした思いがけず「世界が広がる」体験にあるのではないだろうか。漱石に対して「漱石の小説や随筆は読むと、この人が夢想と思索をたえまなく往来する人であることがわかるけれど、漢詩においてもまた同じだったのだ」（130頁）という評もきらりと光る。学術書のような体裁とはおよそ異なるが、この人の学識が相応に深く、目が確かなことは明らかだ。